

秋も深まってきた今日この頃、先生方にはますますお忙しい日々を  
過ごされていることと存じます。

1年2か月間、家庭教育支援を受け、このたび卒業させて頂くことに。

悩んでいたあの時、ハアレソフキャンプの存在を知り、支援を受け  
られたことは、本当に幸運だったと今改めて感じます。

もしあの状態が続いていたら、家族はどうなっていたでしょう。

本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

小学1年生から2年生に進級してはいたとのこと。息子は不安げな  
表情を私に向け、「先生怖い…」と訴えてきました。

最初は何かあったのかな…と息子に学校であつたことと  
根拠も葉も尋ね、また不安に思っていることが沢山でも

取り除いてやろうと、先回りして過保護、過干渉に拍車を  
かけてしまいました。そのために行動が家庭と学校とのギャップと  
より深くしてしまっているのも知らずに…

毎日、大泣きしての行き渋りと同時に、「抱っこして」「トイレ  
一緒についてきて」「お風呂が寝るまで一緒に添い寝して」など、  
次第に母子分離不安の状態になり、どうすれば良いか

分かります。私には夫婦は途方に暮れてしまいました。

思えば、息子はどちらかというと優等生タイプでしたが、その反面、

家ではかんしゃくを起すことと止まらないうちなど、非常に幼い面も

あり、情緒が安定しないところがありました。それまで、「子どもの

しつけは親の責任」という思いが必要以上に強く、また、

子育てに関しても完璧を目指そうな、融通の利かない

考え方をしていたと思います。子ども = 親の評価という

偏った頭もどこかにありました。それなのに、自分が疲れて

いたり、余裕がない時はその時の感情でつくづくと

しまったり、子どもの話を共感的に聴いていないから、

ちぐはぐな対応が、その時の息子の状態を作り出して

しまっていたのだと思います。

現状を抜け出すにはどうすればいいのか...悩ましながら

インターネットで色々検索していたところ、Pアレンソンの

HPに辿り着きました。サイトの文面を読み、「そういうこと

だ、だから...」と引、かかっていたものが腑に落ちたのと

同時に、今までの自分の子育てを猛省しました。

早速、水野先生の書籍を購入し、拜読しました。

今朝で良かれと思っしてきたことば「ほとんど子どもの  
自立を妨げることだ」とことばのかかり、胸を痛めたばかりも  
何回も読み返しました。そして、主人と相談し、自分  
たちの家庭に合った支援をお願いすることにしました。

最初は、今朝での対応をほかのへの変更のことばでできず、  
後になつて反省することもありました。子ども、それまで  
あった、親からのアドバイスがなくなりました。自分で考えることと  
余儀なくされてイライラしているのが手に取るようにわかりました。  
それでも、なるべく共感姿勢を心がけて接していると、  
だんだんと子どもにも変化が見えてきました。

次第に、朝の行き渋りはなくなりました。「先生怖い……」という  
言葉も言わなくなりました。また、「親が変われば、子が  
変わる」というのを実感した日々でした。

その後も、家庭教育の方法にかつて、たくさんのことを学ばせて  
いただきました。初回、自分の子育てに大きく自信を失って  
いた私の話を、穏やかに聴いてくださった辻先生。

ずいぶん心がかげられました。

そして、卒業まで担当してくださった山下先生。いつも優しい。

どんな相談や愚痴にも耳を傾け、一つ一つ丁寧に的確な  
アドバイスをくださいました。何れ、先生は、どんな言葉でも  
まず「共感」してくださっていました。共感してもらうことで、  
人は心を開くことができて、子育てでもまずは共感する  
ことが大切ということと先生との会話を通じて身を持って  
実感することができました。

子どもの自立心を伸ばし、生きる力をつけさせたいという願いは、  
支援を受ける前も、受けた後も変わっていません。

しかし、その導き方は大きく違っていました。手出し口出しを  
敷いてやるより、子どもの力を信じてただ見守っているほうが、

子どもは伸びるということ。長い目で見ると、一生のうち、子どもと  
一緒に過ごせる時間は意外と短いことを考えると、今の

この時間は、かけがえのないもの、大切にしなければと深く  
思います。まだまだこれから、子どもが成長するにつれて

様々な壁にぶつかることもあると思いますが、今後は先生方  
から教わったことを教訓に、夫婦で話し合いながら、

楽しんで子育てしていきたいと思っております。

水野先生、山下先生、パティシエキャンプの先生方の皆様の  
ご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

本当にどうもありがとうございました。

2016年11月